

批評と紹介

東
洋
学
報

A.D.スチュアート著

アルメニア王国とマムルーク朝： ヘトゥム 2 世時代（1289—1307）の戦争と外交

中 町 信 孝

10世紀のトルコ人西進を契機として、大量のアルメニア人が故地であるアルメニア高原を離れ、中東世界に拡散した。一般に「交易民族」として知られるアルメニア人だが、彼らの中には軍事力を持ち政治的に活躍する者も多かった。11世紀末にアナトリア東部に独立政権を築いた Philaretos や、ほぼ同時期のエジプトを支配した Badr al-Jamāli ら軍人宰相がその例である。中でもキリキア地方に成立したアルメニア王国⁽¹⁾（1198—1375）は、同地のアルメニア人社会の政治的中心となったのみならず、中東のアルメニア人たちの宗教的な中心ともなったため、オスマン朝時代を経て現代に至るまでの中東各地におけるアルメニア人定着の歴史の中で大きな役割を担った⁽²⁾。

本書はそのキリキア＝アルメニア王国の歴史を、13世紀後半から14世紀初めの中東情勢の文脈、特にマムルーク朝との関係からとらえ直そうとする研究である。当時の中東世界は、アッバース朝政権や十字軍国家など既存の政治権力が姿を消し、マムルーク朝やイル・ハーン朝などの新興勢力によって国際秩序が再編される時期にあたっていた。そのような時代に、200年近くにわたって存続したアルメニア王国は、当時の国際関係を考察する上で是非とも考慮に入れねばならない存在であろう。

著者のスチュアートは1971年生まれ、英国の聖アンドリューズ大学で1999年に博士号を取得した若きアラビストであり、本書は著者が同大に提出した博士論文を基にしている。

それではまず、本書の構成と内容を紹介してみよう。

本書冒頭は、目次、緒言、挿図一覧に続き、アルメニア語とアラビア語の固有名詞の表記法と暦法の説明がある。

序章では、先行研究、史料、アルメニア王国の地理について説明がなされるが、ここでは本書の立脚点が明確に現れている先行研究の紹介部分に注目したい。著者はまず、英仏語文献での先行研究を概観する。それによるとア

第八十五卷

三〇二

ルメニア王国に関する従来の研究は、ほとんどがアルメニア語史料からラテン語史料などを中心に用いたものであり、アルメニア王国の役割を過大評価する傾向があったばかりか、基本的な事実認識の誤りさえ見られると言う。このような問題点は、「アルメニア側史料 (pro-Armenian sources)」しか用いないことに起因し、マムルーク朝側の観点から記されたアラビア語史料と対照することで、「アルメニア王国の歴史とその中東における位置をよりよく理解」(p. 14) することができる、というのが著者の着眼点である。一方で著者は、M. Canard⁽³⁾ による研究を、アルメニアとマムルーク朝の関係史を「より広いマムルークとモンゴルの対立という文脈において」分析しているとして高く評価する (p. 16)。

さて本文に入り、第1章「アルメニア人、マムルーク朝、モンゴル人とフランク」では、章題にある4勢力の前史が概述される。いずれも簡潔な記述ではあるが、アルメニア王国を取り巻く国際関係をマクロな視点からとらえようとする著者の意図が窺える。

続く第2章は「マムルーク朝の興隆から684/1285年協定まで」と題し、1243年から1285年までのアルメニア、マムルーク朝両国の関係史を概観している。この時代設定は、モンゴル軍がルーム・セルジューク朝軍を破ったキョセダグの戦いから、アルメニア国王レオン2世とマムルーク朝スルタン、カラーウンとの間で協定が結ばれるまでにあたるが、それは前述の Canard の研究が対象とする時代に一致する。この箇所では著者は、近年の諸研究や新刊史料から得られた情報を補いつつ、基本的には Canard の立論をなぞる形で記述を行っており、特に1285年協定には交易路としてのキリキアの位置を重視したカラーウンの意図が反映されているとする見方は、Canard の見解を全く踏襲するものである。

第3章「ヘトゥム2世の治世」は、65頁から183頁と本文の6割以上を占める、本書の核心をなす部分である。第3章はさらに12の節に分かれており、その構成は以下の通りである。ただし、各節の番号は評者が便宜上付したものである。

1. 十字軍国家の終焉 / 2. フレグの後継者 / 3. アシュラフ・ハリールの征服活動 / 4. ヘトゥム王の退位 / 5. 697/1298年マムルーク朝の遠征 / 6. Sülemish の反乱 / 7. ガザンのシリア侵攻 / 8. 701/1302年シース攻撃 / 9. 703/1204年マムルーク朝の遠征 / 10. 704-5/1305-6年マムルーク朝のキリキア侵略 / 11. ヘトゥムの暗殺 / 12. イル・ハーン、ハルバンダ・オルジェイトゥ

マムルーク朝によるアッカ征服の様子を略述した第1節を除けば、各節の扱う内容は大きく4つに分類できる。すなわち①アルメニア王国の政治状況(4、

11)、②マムルーク朝によるアルメニア王国への侵攻 (3, 5, 8, 9, 10)、③アルメニア王国とイル・ハーン朝との関係 (2, 12)、④マムルーク朝とイル・ハーン朝の関係 (6, 7)である。以下にこれら4分類を説明する。

まず分類①の各節で問題とされるのは、ヘトゥム2世の実際の在位期間と、彼の周りでの王位争いについてである。ヘトゥム2世は、ある時は弟王に讓位して修道院に隠遁し、またある時は別の弟により投獄されるなど、退位と復位を繰り返す、最後はイル・ハーン朝の将 Bularghu により殺害された。しかし、アルメニア側史料にのみ頼っていた先行研究では、それぞれの事件の正確な年代すら明らかになっていなかったのである。ここで著者はアラビア語史料の記述との突き合わせによって、基本的な事件の前後関係を復元する。

次に分類②の各節である。ヘトゥム2世の在位期間は、マムルーク朝においてはカラーウン没後からナースイル・ムハンマド第3治世の間の混乱期に相当するが、この間同朝は6度にわたって対アルメニア遠征を行っている。マムルーク朝の軍事行動については当然ながらマムルーク朝側史料に詳細な情報が含まれているので、著者はアラビア語年代記数点の記述を収集してそれぞれを比較検討しつつ、行われた戦闘の経緯を詳述している。ここで著者は、同朝の対外政策が内政と不可分の関係にあったことをたびたび指摘しており、例えばアシュラフ・ハリール期やラージン期においては、有力アミールに対アルメニア遠征を命じることが、彼らを政權の中核であるカイロから遠ざける手段としてしばしば用いられたという。

分類③④はいずれも、イル・ハーン朝に関係する記述である。アルメニア王国にとって宗主国であるイル・ハーン朝との関係は常に重要な政治課題であり、イル・ハーン君主の交代はそのたびに王国内の政治に大きな影響を与えた。他方、マムルーク朝とイル・ハーン朝の関係史については、例えばイル・ハーン朝のアナトリア総督 Sülemish のマムルーク朝への亡命事件のように、本書の主題にとっては周縁的に感じられる事柄も扱われている。しかし、ガザンによるダマスカス征服に従軍したアルメニア軍が、ダマスカス近郊の略奪に積極的に関わっていたという指摘は、マムルーク朝とイル・ハーン朝との対立の中でアルメニア王国が重要な役割を果たしていたことを示す好例と言える。

結びの章では、ヘトゥム2世殺害からマムルーク朝に征服されるまでのアルメニア王国の歴史が概観されたあと、本書の成果がどのような貢献をもたらすかを論じて全体の締めくくりとしている。本書の貢献とは、第一に「西洋の」アルメニア史研究者に対してアラビア語史料の重要性を認識させること、第二にマムルーク朝史家に対してその複雑な外交政策と内政との不可分

な関係を示すこと、そして第三には非専門家が当時の中東、東地中海の歴史を理解するのに役立たせること、の3点である。

巻末には、アルメニア王ヘトゥム家の5世代に及ぶ家系図、著者自身がキリキア地方に赴いて撮影した16点の写真、キリキア地方の地図、文献目録、索引が付されている。

以上が本書の概要である。本書の分析は政治史・事件史の範疇に特化されており、著者も述べており、アルメニア王国の社会制度や同王国における通商活動のような事象にはほとんど言及がない (p. 191)。それでもその記述の細かさは、アルメニア史、マムルーク朝史はもちろん、前近代の中東世界を研究する多くの者にとって、今までになじみのない世界に関する情報を得るための大きな助けとなる。しかし、その細かな記述がどのような手段を経て導き出されたものであるかは、今一度吟味をしておく必要があろう。以下では、史料的側面にこだわって、本書の批評を試みたい。

まずはアラビア語史料に関して、本書が対象としている13世紀末から14世紀初頭にかけての期間は、マムルーク朝文献学の金字塔とも言える D. P. Little の研究⁽⁴⁾があり、著者も参考史料を選ぶ際にはこれに大きく依拠している。しかし本書では、Little が当該時期における最重要史料と位置づけたいくつかの同時代史料のうち、Baybars al-Manṣūri、al-Nuwayri、al-Jazari などの年代記は直接参照されていない。このことは、著者が史料の参照を「刊行本として広く利用可能なものに限定」(p. 18) しているためと考えられるが、これら3者の年代記はいずれも1998年までに校訂がなされており⁽⁵⁾、本書の出版前にそれらを参照することは十分に可能であったはずである。一方、本書ではこれらの同時代年代記を補う形で、より後の時代に著された al-'Ayni の年代記を頻繁に引用している⁽⁶⁾。確かに al-'Ayni は、上述の Baybars、al-Nuwayri などマムルーク朝前期の歴史書の内容を数多く含んでいることで知られるが⁽⁷⁾、やはり一次史料の利用についてはより厳格な姿勢が求められよう。

次にアルメニア側史料についてであるが、多くのアルメニア語年代記が著された13世紀半ばに比べ、本書の対象時期をカバーする史料は少ない。その中で著者は、言語面での制約からアルメニア語史料を直接参照できなかったものの、ラテン語および古フランス語で書かれた Hayton の年代記については原文をきちんと参照している。しかし、本書の分析を際立たせているのは、アルメニア語写本奥付からの引用であろう⁽⁸⁾。写本奥付とは、聖書や祈祷書などアルメニア語写本の奥付として筆写生によって記された記述のことであり、これらを同時代史料として利用することで、個々の事件の年代特定が可能になるばかりでなく、年代記史料からは抜け落ちていた下からの視

点を補うこともできる。本書の後半部分はこのような写本奥付から、マムルーク朝の侵略やイル・ハーン朝の政情に対するアルメニア人書記たちによる観察が多く引用されているため特に精彩に溢れた部分となっており (pp. 152-153, 163, 165, 174-177, 182-183)、アルメニア語写本奥付の利用価値の高さが認識される。ただし、本書が用いた A. K. Sanjian による写本奥付集成は、あくまでアルメニア語版からの抜粋訳にすぎず、また扱う時代も 1301 年以降に限られている。もしアルメニア語を直接参照することが可能ならば、Sanjian の集成には収録されていない時代の奥付を用いることもできるのである⁽⁹⁾。

さらに、ペルシア語史料が直接参照されていない点も不満が残る。本書の考察においてイル・ハーン朝の動向の比重が大きいため、当該テーマに関してのペルシア語史料の重要性は明らかであろう。例えば、Rashid al-Din の『集史』に関して著者は、「彼の歴史 (『集史』) は、アルメニア王国に直接的に関係する情報はわずかしか与えてくれない」(p. 23) と述べているが、J. A. Boyl の研究を通じての引用は数回に及んでいる⁽¹⁰⁾。そして、それらの記述はいずれもアルメニア王国の内政に関わる重要な情報を含んでいるのである。

このように参考史料に着目すると、アラビア語史料、アルメニア語史料、ペルシア語史料のそれぞれに関して不十分な点が指摘できる。この点で、本書はアルメニア王国史、あるいはアルメニアとマムルーク朝の関係史に関する決定的な研究とは、決して呼べないのである。

このことは、アルメニア王国とマムルーク朝の関係史、ひいては近代以前の西アジア地域史というジャンルが抱えている課題を端的に示している。外交史、国際関係史という側面で当該時期の西アジアを分析するには、当時の西アジアはあまりにも多くの国家、勢力が存在していた。それぞれの勢力は異なった言語圏に属しており、そのためそれらすべての歴史を総合的に把握するには、まずは多言語による史料世界の探索という課題が立ちはだかつていたのである⁽¹¹⁾。

それでも近年、本書に類する研究、すなわちマムルーク朝とその近隣諸国との関係史を扱った研究が数多く著されている。例えば本書でもたびたび参照されている R. Amitai-Preiss、および C. Melville のイル・ハーン朝研究、十字軍国家に関する P. M. Holt、サファヴィー朝に関する W. W. Clifford、オスマン朝に関する Shai Har-El などである⁽¹²⁾。これらの諸研究の中に本書を並べてみれば、近代以前の西アジア地域における国際関係の多元的な様相が見て取れよう。そのような意味で本書は、多くの課題を残しているとはいえ、当該時代の西アジア研究にとって不可欠の論点を提示して

いると言える。今後、本書では扱われなかったアルメニア王国末期の歴史をも射程に含めた研究が現れて、この論点が補われていくことを期待したい。

最後に一点、キリキア地方の地名については、アラビア語、アルメニア語、そして現代トルコ語と様々な呼称があり、それぞれの同定は困難を伴う。本書では多言語史料を用いてこれらの地名の同定を丁寧に行っており、他の研究者の利用に資するところは大きいだろう。しかし残念ながら、それらの記述はそれぞれの脚注の中に納められてしまっている⁽¹³⁾。もし巻末に地名一覧としてまとめられていれば、キリキア地方史の簡便なりファレンスとしての本書の利用性は高められたはずである。

註

- (1) 邦文献では「キリキア=アルメニア王国」あるいは「小アルメニア王国」と呼ばれることが多い。cf. 海老沢哲雄「キリキア=アルメニア王国とモンゴル帝国」『埼玉大学紀要教育学部（人文社会科学）』25:1（1976），pp. 45-60. 著者は、この王国がキリキアのみを領有していたわけではないという点、同時代の「西洋側」史料には「アルメニア王国」という呼称が用いられている点を指摘し、本書においては特に「アルメニアのキリキア王国（Cilician Kingdom of Armenia）」という表現は用いないと明言している（p. 24）。ただし、p. 56において唯一「アルメニアのキリキア王国」との表現が見られるが、これは誤用であろう。
- (2) イスラム世界におけるアルメニア人の歴史については、*The Encyclopaedia of Islam*, new ed. の“ARMĪNIYA”“CILICIA”の各項を参照。
- (3) “Le royaume d’Arménie-Cilicie et les mamelouks jusqu’au traité de 1285,” *Revue des études arméniennes*, nouvelle série 4（1967）, pp. 217-259.
- (4) *An Introduction to Mamluk Historiography: An Analysis of Arabic Annalistic and Biographical Sources for the Reign of al-Malik an-Nāṣir Muḥammad ibn Qalā’ūn*, Wiesbaden, 1970.
- (5) Baybars al-Manṣūrī, *Zubdat al-fikra fī ta’riḫ al-hijra*, ed. D. S. Richards, Berlin, 1998. さらに本書の刊本としては、最近出版された *ibid.*, ed. Zubayda Muḥammad ‘Aṭā’, Cairo, 2001 があるが、誤植が多く、使用している写本にも問題がある。al-Nuwayrī, *Nihāyat al-arab fī funūn al-adab*, vol. 32, ed. Fahīm Muḥammad ‘Alawī Shaltūt, vol. 33, ed. Muṣṭafā Hījāzī, Cairo, 1997-1998; al-Jazarī, *Ta’riḫ ḥawādith al-zamān wa-anbā’i-hi wa-wafayāt al-akābir wa’l-a’yān min abnā’i-hi*, ed. ‘Umar ‘Abd al-Salām Tadmurī, 3 vols., Ṣayḍā & Beirut, 1998.

- (6) たとえば、“al-‘Aynī, quoting al-Nuwayrī…” (p. 161, n. 421) という形で、史料の孫引きをする箇所が多く見受けられる。
- (7) al-‘Aynīにおけるマムルーク朝前期歴史書の引用については、Baybars al-Manṣūrīの前掲刊本 Richards 校訂版pp. XXXIII-XXXIV、および Little, *op. cit.* (4), pp. 80-87; idem, “The Recovery of a Lost Source for Bahri Mamlūk History: al-Yūsufī’s *Nuzhat al-Nāzir fi Sirat al-Malik al-Nāṣir*,” *Journal of the American Oriental Society*, 94 (1974), pp. 42-54 を参照。特に Little は、al-Yūsufī の散逸した年代記を再構成するには、al-‘Aynī がもっとも信頼できる史料となると指摘している。また、al-‘Aynī が “qāla Ibn Kathīr (Ibn Kathīr 曰く)” として引用する記述については、当の Ibn Kathīr の年代記中からは確認できない記述が多い。cf. al-‘Aynī, *‘Iqd al-jumān* (以下 *‘Iqd*), iv, 184 と Ibn Kathīr, *al-Bidāya wa’l-nihāya* (以下 *al-Bidāya*), xiv, 20 (本書p. 155 ff.); *‘Iqd*, iv, 300-301 と *al-Bidāya*, xiv, 30 (本書p. 159 ff.); *‘Iqd*, iv, 384 と *al-Bidāya*, xiv, 37 (本書p. 165 ff.)。al-‘Aynī と Ibn Kathīr との関係については、今後の文献学的分析が待たれる。
- (8) *Colophons of Armenian Manuscripts, 1301-1480: A Source for Middle Eastern History*, Cambridge, Mass., 1969. この時代のアルメニア語史料については、北川誠一「13-15世紀のアルメニア語史料」『史朋』6 (1977), pp. 1-23 を参照。
- (9) 北川前掲論文(前掲註(8))未所収で、本書の対象年代に大きく関わる写本奥付のカタログは、A. S. Mat’evosyan, *Hayeren Jeragreri Hishatakaraner XIII dar (Colophons of Armenian Manuscripts of the Thirteenth Century)*, Erevan, 1984.
- (10) イル・ハーン朝関連の情報については、J. A. Boyle ed., *The Cambridge History of Iran*, V, Cambridge, 1968 が頻繁に参照されている。W. M. Thackston による『集史』の英訳 (Cambridge, Mass., 1998-99) も巻末の文献目録に挙げられているが、十全に用いられてはいない。
- (11) 多言語という観点で言うならば、本書がロシア語の先行研究については一切コメントがない点にも疑問を呈したい。例えば海老沢前掲論文(前掲註(1)) pp. 45-46 に挙げられているロシア語先行研究は、本書ではまったく触れられていない。
- (12) R. Amitai-Preiss, *Mongols and Mamluks: The Mamluk-Īlkhānid War, 1260-1281*, Cambridge, 1995; C. Melville, “The Year of the Elephant, Mamluk-Mongol Rivalry in the Hejaz in the Reign of Abū Sa’id (1317-1335),” *Studia Iranica*, 21 (1992), pp. 197-214; P. M. Holt,

Early Mamluk Diplomacy (1260-1290): Treaties of Baybars & Qalā wūn with Christian Rulers, Leiden, 1995; W. W. Clifford, "Some Observations on the Course of Mamluk-Safavi Relations (1502-1516/9 08-922)," *Der Islam* 70:2 (1993), pp. 245-278; Shai Har-El, *Struggle for Domination in the Middle East: The Ottoman-Mamluk War 1485-1491*, Leiden, 1995.
(13) pp. 46-47 (Bahasnī/Behesni/Besni), 49-50 (Darbasāk/Tarbsag/Nur Dağran), 59 (Baghrās/Baghras/Bakras), 73-74 (Qal'at al-Rūm/Hromgla/Rumkale), 89 (Tall Hamdūn/T'il Hamdun/Toprakkale) など。

Angus Donal Stewart, *The Armenian Kingdom and the Mamluks – War and Diplomacy during the Reign of Het'um II (1289-1307)*, Leiden: Brill, 2001. xi+215p.